

チック症の箱庭療法

—イメージ変遷の法則性について—

安藤嘉朗* 熊谷輝** 小井田潤一***

抄録 チック症児5例の箱庭療法の過程を報告し、法則定立的な見地から検討した。従来の箱庭療法の報告は症例記述的方法によるものであるが、5症例の箱庭療法の経過を法則定立的に見ると、治療過程における箱庭イメージの変遷に、バリエーションはあるものの次のような共通した段階が見てとれた。

- 1) 問題の提示（脅威・禁止の存在、自由なエネルギーや攻撃性の封じ込めの表現）。
- 2) 左右や内外の分割と流動。
- 3) 伯仲した「戦い」などの対峙・均衡。
- 4) 「耕し」「工事」の表現、あるいは作ったり壊したりの砂遊び。

そして、このような箱庭イメージの変遷における法則性はチック症治療の一つの里程標になりうると思われる。

さらに、これらの展開は、箱庭表現により患児の自我が、脅威にさらされ抑圧されていた内的衝動や攻撃性と出会い、自律性を獲得していく過程であると考えられた。

弘前医学 37: 730—741, 1985

Key words: tic disorders sand play therapy
nomothetic method image transition
healing process

SAND PLAY THERAPY OF TIC DISORDERS

—Nomothetic studies on the image transition—

YOSHIAKI ANDO*, AKIRA KUMAGAI** and JUN-ICHI KOIDA***

Abstract In this paper we report the process of sand play therapy in 5 cases of tic disorders from a nomothetic viewpoint.

The previous studies on sand play therapy have applied the ideographic method. Using the nomothetic method, we can find certain common features in image transition during the healing process.

We point out the following 4 stages in the image transition :

- 1) Presentation of problem—an expression of menace, prohibition, repressed energy or aggression.
- 2) Division—left and right, “in” and “out”, and a movement between the two.
- 3) Confrontation and balance—an evenly matched struggle between the left and right.
- 4) Construction—cultivation, road construction, or repeated construction-destruction.

To use this transition as a reference can be of great value in analyzing the stage of the healing process of tic disorders.

Furthermore, we view this transition as an expression of the ego's process to achieve autonomy over repressed inner impulsion or aggression.

Hirosaki Med. J. 37: 730—741, 1985

弘前大学医学部神経精神医学教室（主任 佐藤時治郎教授）

* 現在、大館市立総合病院神経精神科

** 現在、八戸市民病院神経精神科

*** 現在、北陽病院

昭和60年3月1日受付

Department of Neuropsychiatry, Hirosaki University, School of Medicine (Director : Prof. T. SATO), Hirosaki, Japan.

* Department of Neuropsychiatry, Ohdate Municipal Hospital, Ohdate, Japan

** Department of Neuropsychiatry, Hachinohe Municipal Hospital, Hachinohe, Japan

*** Hokuyo Hospital, Ichinohe, Japan

Received for publication, March 1, 1985

1. はじめに

箱庭療法の症例記述的方法 (ideographic method) からの報告は数多いが、治療の里程標を作るような法則定立的方法 (nomothetic method) からの研究は、臨床的有用性の検討を含めて、今後の課題と思われる⁵⁾。また、チック症に対する箱庭療法による症例報告も比較的多いが、その経過についての比較検討はなされていないと思われる。このたび、われわれはトゥレ症候群を含むチック症児 5 例の箱庭療法を経験し、その治療経過における箱庭イメージの変遷に共通性が見てとれたので、症例経過と共に箱庭像を提示し、若干の考察を加えて報告する。

2. 症例報告

症例 1 N君, 9歳男子。

X-2年, 妹誕生時に両眼瞼をしばだたせるチックが数週間続いた。X年1月より再び瞬目のチックがおこり、3月末には瞬目や眉間をしかめたり、右顔面がひきつるようなチックが目立つようになる。

父は甲子園に出場したこともあるスポーツマンだが仕事が忙しく、休日も家を空けることが多い。母は父や弟と比べて太って鈍感なN君をだらしなく思い、何かと干渉し叱りつけてしまう。N君は「母は怖い、塾は疲れる」と吐露し、母親の支配的過干渉による情緒的圧迫が認められた。

X年4月16日から9月8日迄、外来通院。

4月24日, 箱庭第1回(図1-a)「森の動物達と狩人」(以下, 箱庭各回のタイトルは著者によるものである)《中央の森の中にいる動物達を左下の狩人が追っていると言うが、動物に象徴される自由な本能衝動が超自我的な脅威にさらされ、封じ込められている表現であると思われる。》

5月1日, 箱庭第2回(図1-b)。「右半面のバス通り」《右半面に道路や建物が置かれ、左右に領域が分けられるが、道を左右に



図 1-a 「森の動物達と狩人」。

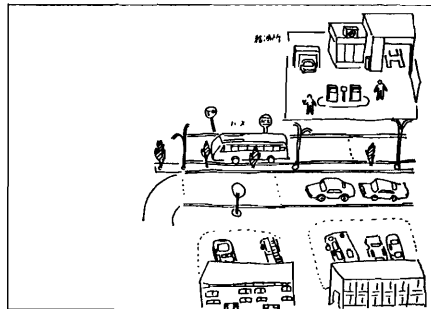


図 1-b 「右半面のバス通り」。

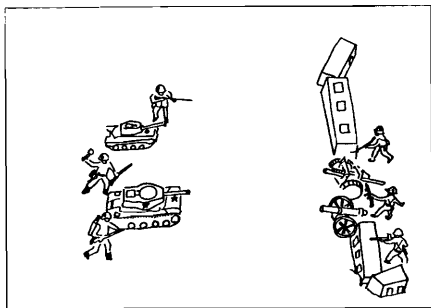


図 1-c 「対峙した戦闘攻防」。

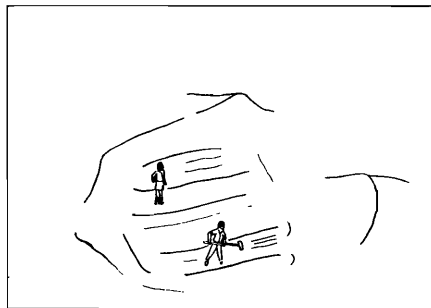


図 1-d 「烟を煽りおこし、種をまく夫婦」。

交通し、内界と外界の交流のきざしを暗示している。同時に置かれた給油所と病院は救済願望を示していると思われた》

5月15日、箱庭第3回(図1-c)。「対峙した戦闘攻防」《右側に要塞、左に戦車軍を置き、左右に対峙均衡した戦闘場面を作る。内的衝動が表面化し、それを自我がうけとめるという変化が感じられた。》

5月29日、箱庭第4回(図1-d)。「畑を掘りおこし、種をまく夫婦」《土をならす男と女をおき、砂に丁寧に線を引き、畑を作る。「耕される土地」は治療の終結する頃によく現われるテーマと言われているが、治療により未開の土地が耕されたことを示すと共に、前回の戦闘で心の中の攻防が一段落し、「再生」の準備段階にあるのではと思われ、期待がもてた。》

この後、N君は箱庭を作りたがらず、同時に母からチックが消失したことが語られた。生活場面では、母は過干渉に気づき、受容的となり、父はN君と時間を共にすることで親密さを増し、N君は塾をやめてサッカーのチームに入るという変化があった。そのような外的変化と共に、箱庭上における内的な作業が進み、チックが消退したと考えられる。

症例2 T君, 8歳男子。

X年5月と8月に瞬目のチックがあり、同年の2学期に入ると瞬目と共に首ふりのチックがおこる。12月初めより首ふりが目立ち、口元をひねるように動かしたり鼻をすすする動作を頻回に示す。夜尿も頻回にある。

父は子供好きだが、T君を脅すような対応をし、家庭内ではやや横暴な面がある。同席面接中にも「鼻をすすったり、オネショをしたら注射だ」とT君を怖がらせ、T君には「……していい」と他人に保証を求める口癖がある。威嚇的な父親による情緒的圧迫の存在を思わせた。

X年12月29日からX+1年2月25日迄、外来治療。

1月5日、箱庭第1回(図2-a)。「蛇、

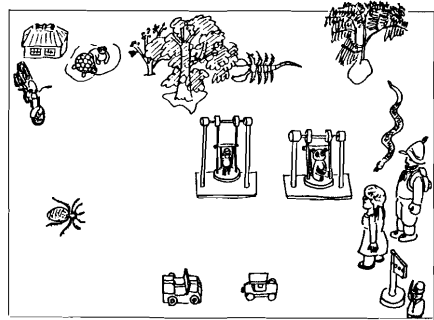


図2-a 「蛇、サツリ、クモのいる公園」。

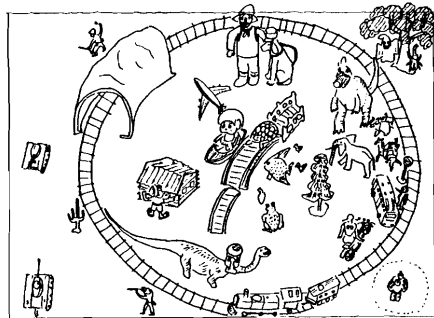


図2-b 「円形の広場」。

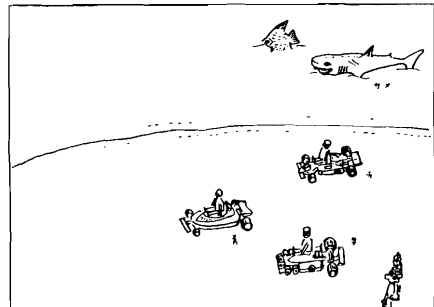


図2-c 「海とカーレース」。

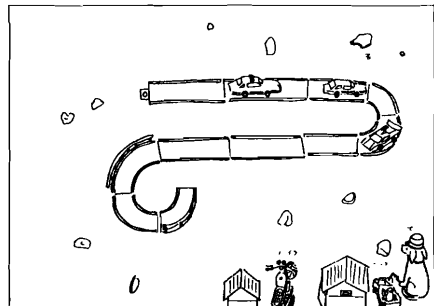


図2-d 「道路と犬の散歩」。

サソリ、クモのいる公園」◀家の近くの公園で、中央のブランコにT君が乗っているという場面を作る。公園の周辺には危険な動物である蛇、サソリ、クモが潜み、T君の周囲にある脅威の表現と思われる。▶

1月13日、箱庭第2回(図2-1b)。「円形の広場」◀円形のプラレールを置いて内外の領域を画し、内側には恐竜や乗物など様々なものが混沌として置かれ、外側にはお化けや戦いが示される。外の脅威に封じ込められた自由な内的衝動の表現と思われた。▶

1月21日、箱庭第3回(図2-1c)。「海とカーレース」◀左右に線をひき、上にサメと熱帯魚、下にレースカーを置き、スタートするところという。▶

1月28日、箱庭第4回(図2-1d)。「道路と犬の散歩」◀左右に行き交う道路に車を走らせる。第3回と共に、心的エネルギーの流動、内界と外界の交流を暗示する。▶

2月4日、箱庭第5回(図2-1e)。「恐竜と鉄人28号の戦い」◀サイボーグをくわえた恐竜と鉄人28号を対峙させ、両者が戦っており、それを右上に置かれた天使が止めようとしているところだと言う。内的衝動と自我との均衡を暗示し、戦いを天使が救うというのは、鎮魂の願望あるいは治療状況を示していると思われた。▶

2月25日、治療当初より夜尿は消え、前回以来、チックも目立たなくなり、通院を終えたいという父と共に来院する。箱庭第6回(図2-1f)。「工場現場」◀ブルドーザーやショベルカーを置き、土を掘っているところだと言い、建設的な再生のイメージが感じられた。▶

症例3 M子、9歳女子。

X-1年6月より左肩をコキッと鳴らしたり、ピクッと拳上させるチックが続き、その後、肘や膝も鳴らすようになる。同年12月より、「アーッ」「オーッ」と叫んだり、馬のいななきのような大声を発する音声チックも始まる。

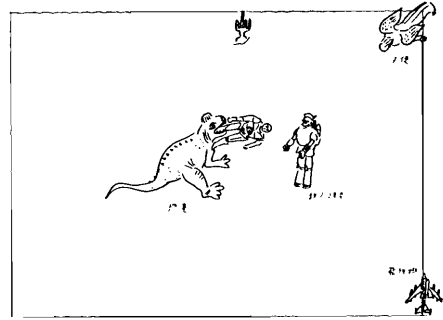


図 2-1e 「恐竜と鉄人28号の戦い」。

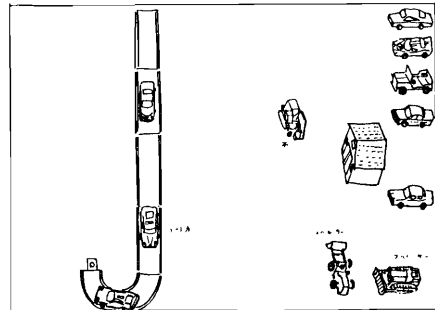


図 2-1f 「工事現場」。

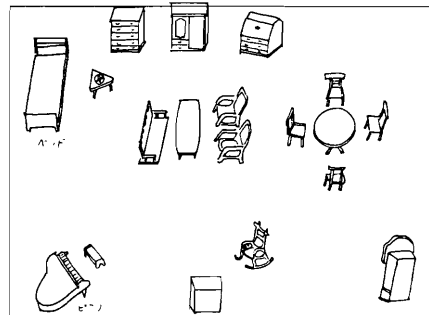


図 3-1a 「人のいない部屋」。

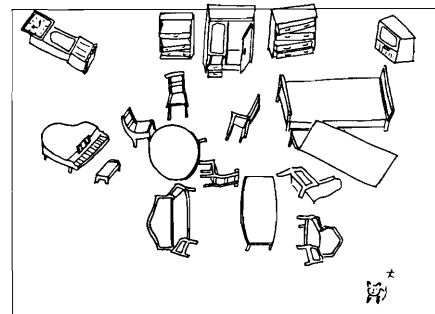


図 3-1b 「泥棒に荒らされた家」。

3歳時に父母が離婚し、母の元で育ち、共生的な母子関係がうかがわれた。M子には母を助ける良い子であらねばならないという構えがあり、母は何かにつけM子に指示的に干渉してしまい面がある。

X年1月6日から5月13日迄、外来治療。

1月7日、箱庭第1回(図3-a)。「人のいない部屋」◀家具のみを置き、形式的、抑圧的でもの寂しい印象を与える。▶

2月18日、箱庭第6回(図3-b)。「泥棒に荒らされた家」◀家具類が倒れ、右下で犬を砂の中に体半分埋める。M子は家が泥棒に入られたところと述べ、家の混乱と外的な脅威を示唆する。▶

3月11日、箱庭第8回(図3-c)。「森の風景」◀中央に池を作り、内外を分ける。池の真中に大樹を立て、大樹の頂きには鷲、池の内側には蛇、鱶、恐竜、サイなど攻撃的な動物を置く。自己の全体性を表わすマンダラ様の作品であり、内的衝動の開示を示唆するものと思われた。▶

3月18日、箱庭第9回(図3-d)。「動物地獄」◀中央の木の左右に動物を向き合わせて置き、さらに左下に小山を作り、そこに5匹の動物を埋め、牛と馬が体半分埋まっている。M子は小山を「動物地獄」と呼び、動物が呑み込まれたのだと言う。動物地獄とはM子やその内的衝動を呑み込む否定的な母親像の表現と思われた。▶

4月18日、箱庭第12回(図3-e)。「陸と海の対立」◀砂をかき出し、残った砂で左に陸を作り、陸の動物と海の中の攻撃的な動物との対立的な表現となる。▶

4月15日、箱庭の砂をかき出したり、砂をまいて砂文字を描くことを繰り返して遊び、箱庭作品は「もう全部作っちゃった」と作りたがらなくなる。その後は毎回、主治医とバドミントンで遊び、5月13日以後通院が中止される。音声チックは1月下旬より消失、運動性チックも殆ど目立たなくなっていた。

症例4 K君, 5歳男子。

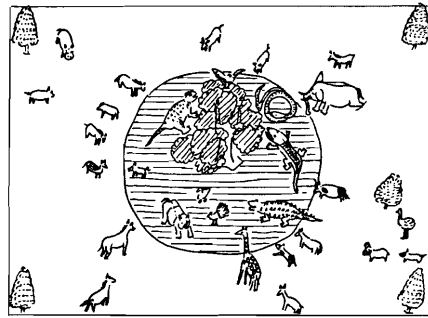


図3-c 「森の風景」.

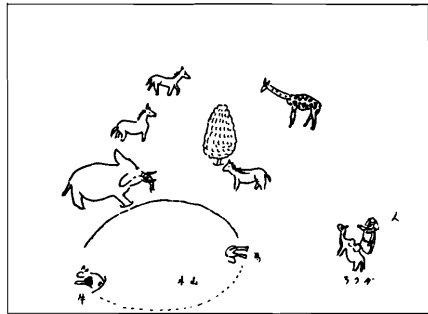


図3-d 「動物地獄」.

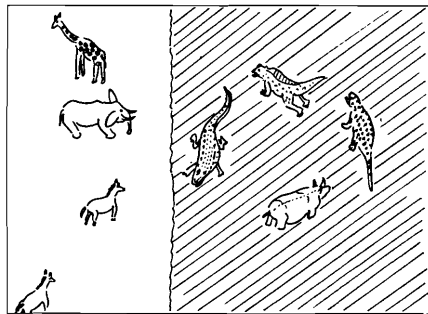


図3-e 「海と陸の対立」.

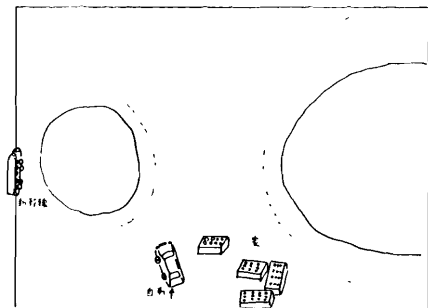


図4-a 「左右の川」.

X-1年暮より頭痛を訴え、頭を押さえることがあり、X年3月初めより頭部を前後に激しく振るようになる。同時に気に入らないことがあると大声をあげ、時に奇声を発するようになる。

ひとりっ子で父母との3人暮らし、X-1年4月より幼稚園に通いが、甘えん坊といわれる。母は子供時代の怪我による身体障害があり、K君をあまり外に出さないようにしている。父と一緒に外出しても、家の近所に線路や用水堰があるために自由な遊びを制限し、「堰におちれば死ぬ」と注意することも多く、活動能力の高まる時期における活動の制限が欲求不満を来たし、チックへと身体化したのではないかと思われた。

X年3月23日から5月4日迄、外来治療。

3月30日、父は意識してK君を自由に外で遊ばせるようになり、首振りと奇声は減るが、替わって瞬目のチックが出現する。

4月6日、箱庭第1回(図4-a)。「左右の川」≪左右に池のような「川」を作り、中央下に家と自動車、左の岸の上に新幹線を置く。右側の川で人形を持ちながら、「この川は段々深くなり人が入れば死んでしまうから怖い」と言う。左側でスピードのある新幹線が砂の上におりれないことは、川にまつわる禁止・恐怖によって内界にこもったエネルギーの存在を暗示している。≫

4月14日、父によれば、最近のK君は気に入らないことがあると、よく父の頭を叩くという。箱庭第2回(図4-b)。「川」≪洋梨型の川を作り、その左淵に自動車、左下に舟と新幹線を置き、「川だ、川におちれば死ぬ」と言う。前回の二つの川が癒合したように一つになり、新幹線は砂の上に降り、自動車が水の傍を走る。分割していた内界と外界が交流すると共に、川に対する禁止・恐怖が減っているように思われた。≫

4月28日、箱庭第3回。≪砂をこねまわし、「川だ」「山だ」と言って遊んでいる。≫

5月4日、瞬目のチックも消失する。箱庭

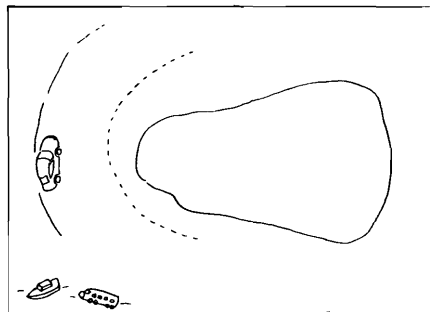


図 4-b 「川」.

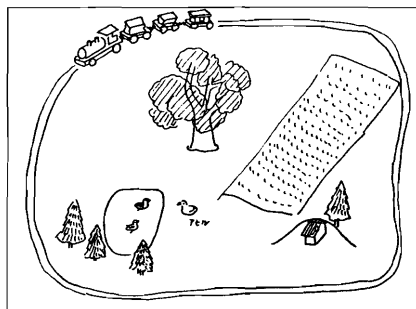


図 5-a 「水鳥の母と2羽の子」.

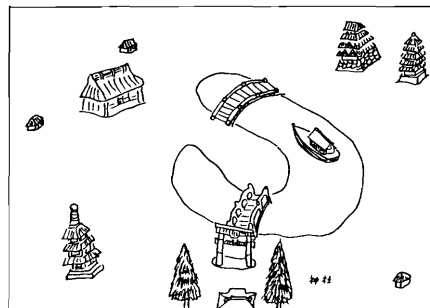


図 5-b 「三日月湖の舟と神社のある風景」.

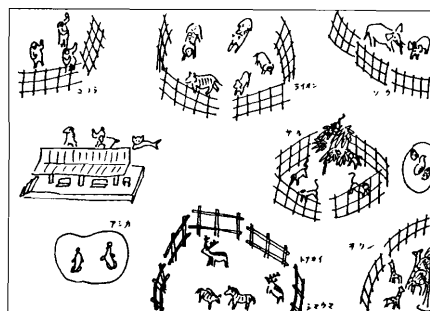


図 5-c 「人のいない動物園」.

第4回、《上部中央の山から下へ川の流れを作り、水を流しては山を壊し、作りなおすことを繰り返して熱心に遊んでいる。》以後、来院しなくなるが、その後の連絡でもチックは消失していた。

症例5 A子, 14歳女子.

X-3年, 小学5年時より, 首振り, 瞬き, 口を曲げる, 手を動かす仕草が出現, 同時に親が弟「ナツオ」より自分に厳しくあたると感じ始めた. X-1年, 中学入学時より, 「アッ」「ウッ」と声をあげるようになる. X年4月よりは「ナツオ, バカナツオ, ブタナツオ, 行ッテマレ, 死ンデマレ^(注)」とか「見タクネ, ハキダメサ戻ッテマレ」と繰り返し大声で叫び, 弟に唾をはくことも加わり, X年7月には授業中にも叫ぶようになるため, 来院. 来院前, 両親は反抗的になっていると思ひ折檻し, A子は自室に籠城したり, 家庭内は険悪な状況であり, A子自身発声を抑えるために頬部粘膜を噛み, 腫脹が見られた. 初診時, A子は涙を流して弟との扱われ方の違いについて不満を吐露した. 症状的には多発性の運動性チック, 不随意的攻撃的発語や汚言を含む音声チックを認め, トッレ症候群と診断された.

家族は父母と12歳で小学6年生の弟との4人暮らし, 父母は見合結婚だが, 父方祖母が母を嫌い, 母は何かとつらくあたられ, 金銭的にも苦労し, A子の出産後は食欲がなく, ひと月で乳も出なくなり, A子は人工乳で育てられた. 1歳2ヶ月でおむつは取れたが小学5年迄夜尿が続いた. 幼稚園時から小学2年迄, 父母の出稼ぎに同行し東京で暮したが, 帰省後友達が少なく, 学校に仲々なじめなかった. 小学5年時に担任が女性の厳しい教師になり, 勉強のピッチも早く, この頃より首振りなどが始まった.

母は父を「仕事は好きだが, 家のことは何

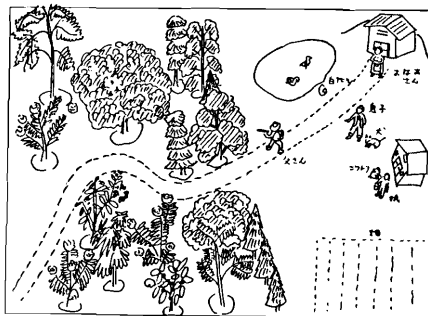


図5-d 「森からの父の帰還」.

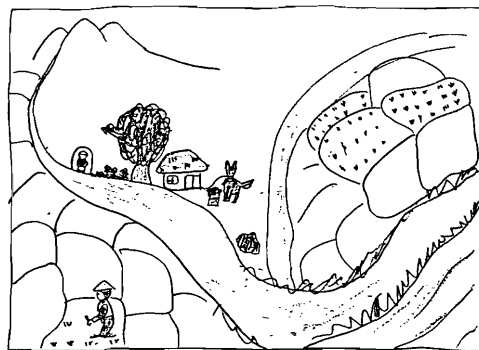


図5-e 風景構成法第1回.

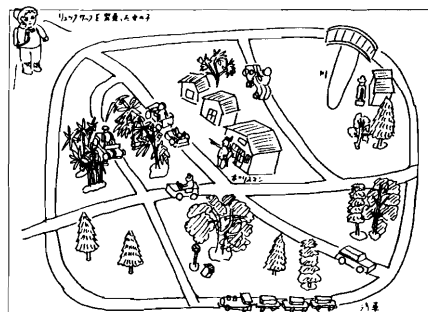


図5-f 「小人の街を訪れた少女」.

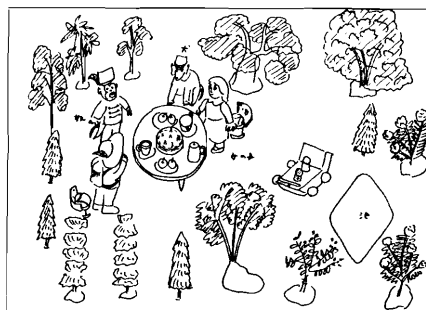


図5-g 「森の中の会食」.

注) 「マレ」は「…してしまえ」, 「ネ」は「ない」という否定の意味の方言.

もしない人」と評し、A子は母を「父に反抗する」「弟ばかり可愛がる」「自分のことを分ってくれない」と述べる。母は勝気な性格でA子にはきついことははっきりと言う。

性格的には勝気、几帳面で神経質、おしゃれで茶目っ気がある。A子自身は「短気で怒りっぽい性格」と言う。

X年7月24日からX+2年3月29日迄外来治療、ハロペリドールの少量投与、症状の無視と受容的な雰囲気作りという家族指導と共に、箱庭療法を行い、その経過を計32回の箱庭の展開から4期に分けた。

第1期；X年7月から8月迄、問題の提示の時期。

7月30日、顎を動かし、腕のびくつきが目立ち、「自分は弟と扱われ方が違う」と訴える。箱庭第1回(図5-a)。「水鳥の母と2羽の子」≪左下の池の中に2羽の水鳥を、岸辺に白い親鳥を置き、周囲にぐるりと線路を描く。母の愛情をめぐる葛藤を思わせ、反時計回りの汽車が今後の無意識への運行を暗示した。≫

8月6日、箱庭第2回(図5-b)。「三日月湖の舟と神社のある風景」≪中央に三日月形の湖、周辺に塔、城、神社を置く。宗教的な作品であり、湖の中の舟は子宮の中の胎児を思わせ、主体性を象徴する塔などの男根的イメージと共に母をめぐる依存と自立の葛藤を考えさせた。≫箱庭終了後、「父に『くたばってまれ、死んでまれ』と言われる、弟は言われぬのに」と涙を流す。

8月20日、箱庭第3回(図5-c)。「人のいない動物園」≪柵で6つの囲いを作り、中に動物を入れる。動物に象徴される内的衝動や攻撃性の抑圧、封じ込めを思わせる。≫

第2期；X年9月から11月迄、森の中での旅が展開され、脅威や攻撃性のイメージ化がなされた。この時期、なお弟に対する唾はき、汚言は続き、弟の部屋の戸を蹴って壊すという攻撃的行為もあったが、9月21日よりA子自ら家を離れて、近所の母の実家で生活

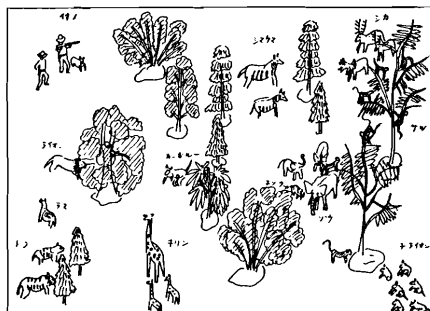


図 5-h 「森の動物達と狩人」。

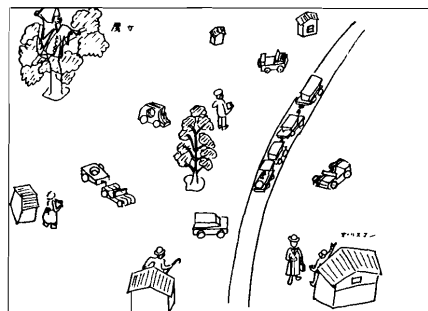


図 5-i 「魔女が時間を止めたところ」。

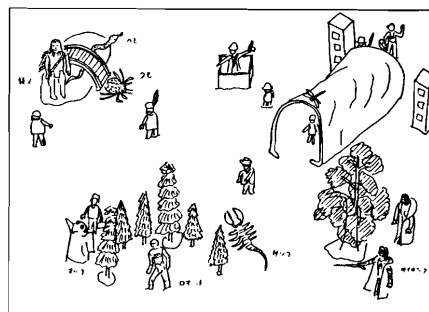


図 5-j 「お化け屋敷のお化け巡り」。



図 5-k 「交通事故」。

するようになり, 表情も明るくなった。

9月4日, 箱庭第4回(図5-d)。「森からの父の帰還」◀左半面に森を作り, 左右が分割され, 道が右上の家に向う。森に象徴される無意識への旅が暗示され, 右下の家庭の領域が耕されている。▶

9月16日, 風景構成法第1回(図5-e)。「人より大きな馬が家につながれ, 大きな内的衝動の抑制を思わせる。」¹¹⁾

9月30日, 箱庭第5回(図5-f)。「小人の街を訪れた少女」◀森の中の小人の街に道路が縦横に作られ, 交通整理される。内面が少しずつ整理され始めているのではと思われた。▶

10月7日, 箱庭第6回(図5-g)。「森の中の会食」◀森の中で, 前回の少女が女の子を訪れ, 誕生日のお祝いにテーブルを囲む場面を作る。A子の新たな自己との出会いを思わせた。▶

10月23日, 箱庭第7回(図5-h)。「森の動物達と狩人」◀一面の森の中に潜む様々な動物を, 左上の狩人が銃でねらっており, 自由な内的衝動を封じ込める脅威を示唆する。▶

10月28日, 箱庭第8回(図5-i)。「魔女が時間を止めたところ」◀魔女が左上の樹の上で, 街の時間を止めた場面だと言う。時間や動きを止める魔女とは否定的な母親像であり, そして, その止められた時間を突き破るのがチックかもしれないと思えた。▶この頃, 自宅に戻ると叫ぶことはあったが, 「弟に会ってもあまり腹が立たなくなった」と語られた。

11月4日, 箱庭第9回(図5-j)。「お化け屋敷のお化け巡り」◀右上の門からトンネルをくぐると蛇, クモ, 猿人, お化け, サソリなどに出会うというストーリーを楽しげに箱庭にする。自己の攻撃衝動との出会いが戯画化され, 表現されたものと思われた。▶

11月10日, 箱庭第10回(図5-k)。「交通事故」◀交通事故で道路上に倒れた怪我人の

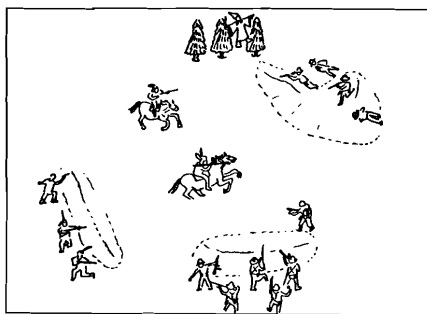


図5-1 「三つ巴の戦いを止める魔女」。

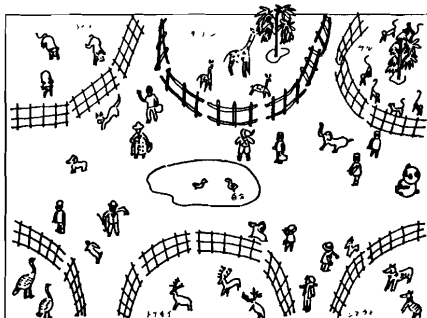


図5-m 「動物園」。

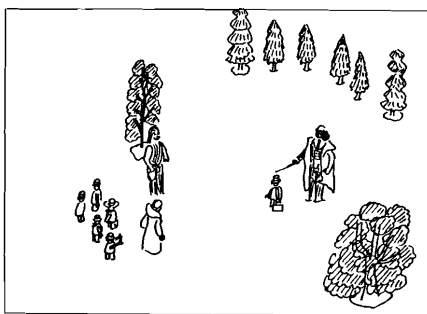


図5-n 「悪者の人質となった小人の救出」。

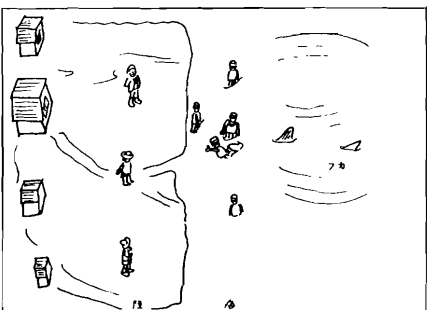


図5-o 「フカの襲来」。

周りに、人や救急車が集まっている。新しい自我形成のための象徴的な『死』を思わせた。》

11月26日、箱庭第11回（図5-1）。「三つ巴の戦争を止める魔女」《三つの軍隊が互いに戦い、第7回迄は封じ込められていた内的衝動が戦闘という形で表現されている。》

これらの経過中、10月9日に自宅が半焼し、内面の変化と共に家の修復が共時的になされ、12月初めの改築を待って、A子は家に戻った。

第3期；X年12月からX+1年5月迄。なごやかな遊びのテーマが続いた後、自我とエネルギーの均衡を思わせる、対峙した戦いが表現される。自宅に戻ったA子は弟の前でも叫ぶことは少なく、母に注意されると「バカフユコ（母）死ンデマレ」などと小声で言うも、唾はきや運動性チックは目立たなくなった。

X+1年2月10日、箱庭第16回（図5-m）。「動物園」《マンダラ様に動物の柵囲いを配置し、中央の池の中の赤い水鳥がA子だという。母鳥が消え、母からの心理的自立を思わせた。》

3月17日、箱庭第18回（図5-n）。「悪者の人質となった小人の救出」《左右に人が対峙し、人質となった右の小人を救出する戦いが始まるという。》

5月13日、箱庭第22回（図5-o）。「ファカの襲来」《海と陸で左右が分けられ、右の海で人がファカに襲われ、左の陸から助けに出る所という。第18回と共に左右の対峙した戦いであり、攻撃性や内的衝動に対する自我の均衡を思わせる。》

4月14日、風景構成法第2回（図5-p）。「女の子が道で花を見つけ、動物はパピヨンという犬で、なわとびをして自由に遊んでいる。規制がとれ、動きのある自由な内的衝動を暗示した。》

第4期；X+1年6月よりX+2年3月迄。公園や街をテーマにした集団場面の箱庭

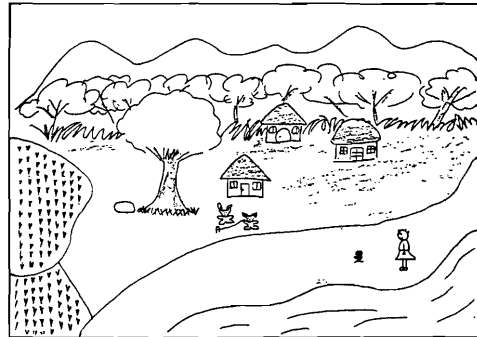


図 5-p 風景構成法第2回。

が作られ、攻撃性の表現は見られなくなった。8月からは攻撃的発語も消え、一時ハミングのような発声があったが、11月には症状は全て消失した。

12月23日、風景構成法第3回。《内的衝動を象徴すると思われる動物は兎で人と並び、自我に親しみのあるものになっている。》

X+2年4月より、A子は高校に進学し、その後も経過は良好である。

本例をまとめると、Kの母親は勝気でやや攻撃的な面のある人だが、姑に嫌われ、父への依存も阻止され、母の愛情欲求はA子におきかえられ、拘束と干渉という形の未分化な母子結合を生んだと思われる。そして、A子は自立を方向づけられる前思春期において情緒的緊張を生じ、本来は自我支配のもとに表現されるべき内的衝動や攻撃性がチックや汚言、加虐的態度として病態化したと推測される。弟に対する攻撃もA子が母から分離していく際の不安を背景にしている故のものと思われた。治療経過をふり返ると、箱庭表現において、内的衝動を抑圧した母と未分離な自我が、未分化であった自らの内的衝動や攻撃性と出会い、対峙し、自律性や主体性を獲得していく過程が、症状の消失と共に見てとれ、風景構成法の変化もそれを傍証するものと思われた。

3. 考 察

チック症の箱庭療法について、トッレ症候群1例を含む5例のチック症児の治療経過から、次に示すような箱庭イメージの変遷が見てとれるのではないかと思われる。

(1) 問題の提示(脅威・禁止の存在, 自由なエネルギーや攻撃性の封じ込め).

(2) 左右や内外の分割と流動.

(3) 伯仲した「戦い」などの対峙・均衡.

(4) 「耕し」「工事」のテーマ, あるいは作ったり壊したりの砂遊び.

症例4では図4—aに(1), (2)が圧縮され, (3)を欠き, 症例5では(4)を欠くも, 症例1, 2, 3は(1)から(4)の過程を順に経過している。

そして, 以上の過程は次のように読みかえることができるのではないかと思われる。つまり, 箱庭という創造的なイメージ表現の場において, 第一にチックという病態を生んだ脅威や禁止と, それにより封じ込められた内的衝動や攻撃性が表現される。次に内界と外界の分割のテーマが表現され, さらに封じ込められていたエネルギーに流動が起こる。そして, 伯仲した「戦い」という形でそのエネルギーと自我の均衡に至り, 続いて「耕し」「工事」のテーマが再生を暗示するように表現され, あるいは死と再生の儀式とも思われる作ったり壊したりの砂遊びが行われ, 箱庭を作る必要がなくなり終結に至るといった共通した変遷である。

要約すれば, 箱庭表現により, 患児は脅威にさらされ抑圧されていた内的衝動や攻撃性と出会い, 統合し, 自律性を獲得していくとすることもできよう。

さらに付け加えると, 患児が治療中, 次第に体を動かすことに関心を示し, スポーツを好んでするようになることが認められたが, エネルギーのまとまった運動への昇華という観点から興味深いことである。

山中はチック症児が箱庭を置くだけで治っ

ていくのを目のあたりにしたと述べている⁹⁾が, 今回のわれわれの経験においても, 箱庭という「自由にして保護された空間」におけるイメージ表現によって, チック症という心の停滞状態から, 今回報告したイメージの変遷のような新しい発達の道が育てられ, 心の変容がなされたと考えられ, 箱庭療法がチック症治療にとって一つの有用な治療法であることが確認された。

さて, 箱庭像を規定する変数として, とりあえず治療者, 治療の場, 玩具の種類があると思われるが, 今回の報告ではこれらに違いがあっても(症例1, 2, 5は安藤, 症例4は小井田, 症例3は小井田・熊谷が治療に当り, 症例1, 2, 5, 症例3, 症例4は各々施設が異なる), 共通的な法則性が見てとれ, さらに文献的に比較しても, 大谷, 山中, 亀井らの報告における経過と類似しており, チック症児に特有なものと思われる。

しかし, 米倉¹²⁾の報告との比較では(1)(2)の段階においては類似しているものの, その他は異なり, 青木, 大場らの報告との比較ではかなり様相を異にしており, 今回の立論はチック症の全てに言及しえるものではないと考えられる。また, われわれの治療例のみにおいても, 夜尿を伴う心因性頭痛の男児例と同様のイメージの変遷を認めており, 抑圧された内的衝動や攻撃性を有する症例の発達の統合のあり方の一つと推測もできるが, 他の疾患との比較についても今後の課題と思われる。

最後に, イメージ変遷についての法則定立的研究の意義に触れたい。治療者が治療の展開や推移を知る意味で, 疾患の治療過程における里程碑を心得ていることは有益であると思われる。今回のわれわれの報告もそのような視点に立つゆえのものであり, ここに示したチック症の箱庭療法におけるイメージ変遷の法則性は, チック症治療を進める上での一つの里程碑になりうると考えられる。ただし, 目安は目安にすぎないのであり, 目安をもちながらも表面的な理解にとどまらず, で

きりるかぎり先入観なしに患児の世界を共有するという二重の見当識が必要なことは言うまでもないことであろう。

また、一般に、表現されるイメージの変遷過程は患児の病理性のみならず、自己治癒力あるいは健康な潜在力、治療者が表現を受けとめる程度などの治療状況、その他の種々の条件に依拠するものと思われるが、イメージの変遷過程に関する法則定立的な見地からの研究は諸精神疾患の治療・寛解過程をめぐる精神病理学の知識を豊かにしていくのではないかと考える。

4. ま と め

トッレ症候群を含む、チック症児の箱庭を用いた治療経験から、その箱庭イメージに(1)問題の提示(脅威・禁忌の存在、自由なエネルギーや攻撃性の封じ込め)、(2)左右や内外の分割と交流、(3)伯仲した「戦い」などの対峙・均衡、(4)「耕し」「工事」の表現、あるいは作ったり壊したりの砂遊びという4段階のテーマの変遷が見てとれたので、5例の経過報告と共に箱庭像を提示、考察し、治療の過程を推しはかる里程標としての意義についても触れた。

稿を終えるにあたり、ご校閲いただいた弘前大学佐藤時治郎教授、症例5につきご指導いただいた京都大学山中康裕助教授、症例の診療に際してご配慮いただいた布施病院布施清一院長、三川博副院長に深謝いたします。なお、本稿の要旨は第14回東北児童精神医学懇話会(仙台市、昭和58年)で発表した。

文 献

- 1) 青木しのぶ：事例1，闇の国の主，蛇の変容。河合隼雄・山中康裕編，箱庭療法研究 1：1-22，誠信書房，1982。
- 2) 大谷不二雄：事例3，チック症，小学6年生男子。河合隼雄著「箱庭療法」：71-78，誠信書房，1969。
- 3) 大場 登，曾根岡祥子，渡辺弓子：“甲い”イメージを箱庭に表現した小児神経症者の心理療法過程。芸術療法，8：39-50，1977。
- 4) 亀井敏彦，山内惟光，西村洲衛男：チック症の遊戯療法場面における表現の多様性について。芸術療法，11：63-72，1980。
- 5) 河合隼雄：箱庭療法の発展。河合隼雄・山中康裕編，箱庭療法研究1：Vii-XViii，誠信書房，1982。
- 6) 西村洲衛男：箱庭療法をとりいれた遊戯療法。佐藤修策・山下勲編，「遊戯療法」(講座心理療法2)：181-201，福村出版，1978。
- 7) フォーダム，M.，浪花博・岡田康伸訳：子どもの成長とイメージ。誠信書房，1976。
- 8) 森野礼一：泥まみれの征服【山中論文へのコメント】。臨床心理ケース研究 2：98-102，誠信書房，1979。
- 9) 山中康裕：精神療法としての箱庭療法。臨床精神医学，8：639-648，1979。
- 10) 山中康裕：多彩な症状移動を呈した神経症児の箱庭療法による象徴的心像変遷と治療過程。臨床心理ケース研究 2：83-97，誠信書房，1979。
- 11) 山中康裕：「風景構成法」事始め。山中康裕編，H. NAKAI 風景構成法：1-36，岩崎学術出版社，1984。
- 12) 米倉五郎：遺糞症，夜尿症，チック症をもつ小児神経症児の心理療法過程一箱庭，粘土，ゲームを介して一。臨床心理ケース研究 4：147-162，誠信書房，1982。